シンポジウム 1

S1-5　糖尿病クリニックの視点から

演者：税所　芳史　（さいしょ糖尿病クリニック ）

近年、新規インスリンアナログ製剤の登場や持続血糖モニター（CGM）の開発、またインスリンポンプ療法の進歩により 1 型糖尿病治療は大きく進歩した。特に CGM により血糖値が常に可視化できるようになったことで患者自身が血糖を管理しやすくなり、そのことが HbA1c の低下のみならず、自己効力感や治療満足度の向上につながっていることを実感する。一方で、皮膚トラブルや外観上の問題、コストの面などから CGM を利用できていない患者も多い。また高齢化に伴いそのようなデバイスの使用やインスリン注射そのものも自己管理できない患者も増えている。一人でも多くの患者が CGM を活用できるような取組みが今後も必要と思われる。

また昨年、緩徐進行 1 型糖尿病（SPIDDM）の診断基準が改訂されたが、GAD 抗体陽性のインスリン非依存状態の患者の治療については悩むことが少なくない。さらに高齢化と並んで 1 型糖尿病患者における肥満の増加も問題である。2 型糖尿病患者においては近年血糖とは独立して心腎保護効果を示す SGLT2 阻害薬や GLP-1 受容体作動薬の使用が増えている。糖尿病関連腎臓病に対する薬剤としてフィネレノンも登場している。しかしそうした新規の薬剤の 1 型糖尿病患者における有効性はまだ明らかではない。本シンポジウムでは糖尿病クリニックの視点から、1 型糖尿病診療の課題について皆さんと考えてみたい。

Profile

税所　芳史

Saisho Yoshifumi

1998 年　慶應義塾大学医学部卒業
1998 年　慶應義塾大学医学部内科学教室入局
2002 年　同　腎臓内分泌代謝内科入局
2006 年　米国 UCLA 留学（Peter C. Butler 教授）
2009 年　慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科助教
2015 年　同　講師
2022 年　さいしょ糖尿病クリニック開設

慶應義塾大学医学部非常勤講師
杏林大学医学部臨床教育准教授
Diabetes Research and Clinical Practice, Associate Editor
Diabetes, Obesity and Metabolism, Editorial board
日本糖尿病療養指導士認定機構試験委員会委員長